

ひな祭りの由来やそれぞれの人形や道具の意味や役割



資料提供：吉徳資料室

3月3日の「ひな祭り」は、女の子の健やかな成長と健康を願う行事として知られており、中国から伝わったとされる「五節句(ごせつく)」のひとつで、桃の花の咲く時期と重なることから「桃の節句」とも呼ばれています。

「ひな祭り」では雛人形を飾るイベントとして、認識されておりますが、その起源や雛人形の種類についてはご存じでしょうか？

ひな祭りの由来

桃の節句は、もともと「上巳(じょうし・じょうみ)の節句」と呼ばれる、中国から伝わった厄払いの行事だとされており、「ひな人形を飾る」のではなく、「水辺で身を清め、厄を払う」といった行事でした。

日本では古くから「紙や粘土、藁で人形を作り、自分の厄や穢れ、災いをして川に流す」といった厄払いの行事「ヒトガタ^{ヒトガタ}流し」があり、これが上巳の節句と結びついたことが行事の始まりと言われております。

そして「上巳の節句」が伝わってきた平安時代、貴族の女の子の間では「紙で作った人形でおままごと遊びをする」という「雛(ひいな)遊び」が流行っておりました。これが「厄払いのヒトガタ」と結びつき、江戸時代になって3月3日にひな人形を飾る文化が生まれたことから「ひな祭り」と呼ばれるようになったと言われております。

かつうらビッグひな祭り

「かつうらビッグひな祭り」は2001年に徳島県勝浦町から約7,000体のひな人形を里子として譲り受けたことから始まり、今では20万人が訪れる一大イベントとして、房総だけでなく、全国のみなさまへ春の訪れをお伝えしております。

イベント開始以来、日本全国からのご寄贈をいただき、年々、飾られる人形の数や飾られる場所も増えていきました。

「勝浦市芸術文化交流センターキュステ」では日本最大級の享保風雛やホール全体に広がる約7,000体のひな人形による特設ひな壇、「遠見岬神社の石段」では早朝の飾りつけや夜間のライトアップを見ることが出来るほか、「覚翁寺」、「墨名交差点」、「釈迦本寺」といった会場だけでなく、一般のご家庭の庭先と、至るところでひな人形に出会うことが出来ます

これらは市民の有志のみなさまにより飾りつけられており、保育園児の手作りひな人形、中学生から大学生のボランティア、婦人会や市内団体のご協力により、市を挙げてみなさまをお迎えいたします。



【人形】

親王(しんのう)様とは

「お内裏(だいら)様」とも呼ばれ、雛段の最上段にいる男雛と女雛のことを表しています。

「内裏」とは天皇の住む所(御所、大内等)のことで、お内裏様とは天皇と皇后の御姿を模したおひな様となります。

また内裏の正殿である「紫宸殿 ※後述」では天皇と皇后の結婚式も執り行われたものとされていることから雛飾りは「天皇と皇后の結婚式を模した飾り」となります。男雛は右手に「笏(しゃく)」を持ち、冠には纓(えい)を立てています。

女雛は「桧扇(ひおうぎ)」という扇を両手で持っており、昔は身分の高い女性は簡単には他人に顔を見せなかったので顔を隠す意味で持っています。

三人官女とは

「官女(かんじょ)」とは宮中に使える女性、つまりは女性の役人のことを指しています。

三人官女は、皇后の世話係で、結婚式のお手伝いも彼女たちの役割です。そのため、手に持っている道具は、一般的には、長柄銚子(ながえのちょうし)、三方(さんぼう)、加銚子(くわえのちょうし)となり、すべてお酒を注ぐためのものとなります。

三人官女の真ん中はお齒黒、眉のない女性となり、これは真ん中の女性の年齢が高いことを表しています。

なお、京雛では真ん中の官女は婚礼の際に用いられ三三九度(さんさんくど)の盃置き役目がある「嶋台(しまだい)を持っています。

五人囃子とは

五人囃子(ごにんばやし)は、結婚式を盛り上げるために「能楽(のうがく)」の楽器や歌を演奏する音楽隊であり、多くは元服前(11歳から16歳くらい)の少年が演じています。それぞれの頭に烏帽子(えぼし)をかぶり、楽器を奏でる囃子方(はやしかた)と地謡(じうたい)とに分かれます。

持っている道具は囃子方は「太鼓」「大鼓(おおつづみ・おおかわ)」「小鼓(こつづみ)」「笛」となり、地謡は「扇」となります。

隨身とは

左大臣と右大臣があくまで俗称で本来は「隨身(ずいしん・ずいじん)」と呼び、お内裏様を守護する役割を担っています。

そのため、結婚式であっても弓矢や刀を持ち、護衛を行っています。

向かって右に老人、向かって左に若者の姿をした隨身を配することが多く、老人の方が高位とされています。これは古来、左側(向かって右)が上位とされているためです。左大臣は年配者であることから知恵を、右大臣は若者であることから力を司ると言われています。



仕丁とは

仕丁(しちょう)とは宮中の雑用を担っており、お内裏様のお供や庭の掃除等を担当していた人たちを表しています。

京雛では「ほうき」「ちり取り」「熊手」といった掃除用具を持っています。

関東雛では「台笠(だいがさ)」「沓台(くつだい)」「立傘(たてがさ)」を持っており、外出用の用具を持っている傾向がありましたが、現在は京雛式に掃除用具を持っているものが増えています。

また、仕丁はそれぞれ表情が異なり、笑い・泣き・怒りをあらわしています。

関東雛・京雛の違い

関東雛と京雛の違いとしては大きく分けて以下の点があります。

	関東雛	京雛
顔立ち	大きな目 微かにほころぶ口元 はっきりした目鼻立ち	切れ長の目に鼻筋の通った細面の 高貴なお顔
三人官女の 持ち物	【三人官女中央】 「三方」 【仕丁】 「台笠」「沓台」「立傘」	【三人官女中央】 「嶋台」 【仕丁】 「ほうき」「ちり取り」「熊手」
衣装	モダンなデザインや創作的な衣装 もある	伝統的な衣装で古典的な柄を多用
並べ方	男雛は向かって左 女雛は向かって右	男雛は向かって右 女雛は向かって左

「並べ方」について

関東雛と京雛では親王飾りの並べ方に特徴があります。

かつうらビッグひな祭りではどちらが正しく、間違っているかということではなく、ひな壇の内容により飾りつけを行っています。

【京雛】

日本では古来「左(向かって右)は右より格が高い」とされており、左が上位とされていたことに従い、左(向かって右)に男雛、右(向かって左)に女雛を飾りつけています。

【関東雛】

昭和3年の昭和天皇の「即位の礼」の写真で、天皇が向かって左に立たれたことを契機に東京の人形業界団体が、ひな人形もそれにならうように呼びかけたため、右(向かって左)に男雛、左(向かって右)に女雛を飾ることが多いです。



関東雛



京雛



五(七)楽人とは

五人囃子ではなく、五(七)楽人(ご(しち)がくにん)が配置されていることがあります。楽人は「雅楽」を奏でる人たちであり、道具は「横笛」「縦笛」「楽太鼓(がくだいこ)」「笙(しょう)」「羯鼓(かっこ)」で、七楽人になるとこれに「琴」「琵琶」が追加されます。

楽人の多くは元服後の成人男性の姿をしており、五人囃子と同様、結婚式を盛り上げるための様子を表しています。

七人雅楽



鶴亀雛とは

「鶴亀雛(つるかめびな)」とは中央に能舞台を配置したひな壇であり、五人囃子の奏でる音楽に合わせて鶴と亀が舞う様子を再現しています。

「鶴は千年、亀は万年」に由来した長寿、繁栄や夫婦円満を象徴し、こどもの幸せや健康を末永く願う思いが込められています。

鶴亀雛



【道具】

雪洞とは

「雪洞(ぼんぼり)」は、「燭台(しょくだい※ろうそく立て)」の一種で、ほんのり灯った様子から「ほんのり」がなまって「ぼんぼり」と、言葉が転化したという説があります。江戸時代には、結婚式は夜間に行うことが一般的であったため、ろうそくの明かりは欠かせないものでした。

※ 1 段目に設置

高坏とは

高坏(たかつき)とは身分の高い方へ食べものを捧げる際に使用する足を付けた丸い器です。ひな祭りでは紅白の丸餅や和菓子を載せて使用します。

※ 1 段目に設置

三方とは

三方(さんぼう)とは神仏の貴人に飲食物を捧げる際の台です。

雛飾りではお神酒を入れる容器の瓶子(へいし※徳利のような形の金属や陶器で出来た物)に、桃の花を挿したものを載せて男雛と女雛の間に置きます。

※ 1 段目に設置

菱餅とは

菱餅(ひしもち)とは、菱形をした餅のことであり、地域や時代によっては二色から七色の色を重ねています。

最も一般的なものは三色で上から順に赤、白、緑となっていますが、雪の下には緑が芽吹き始め、雪が溶けだした上に桃の花が咲いている様子を表したものとされています。

※ 2 段目に設置

桜・橘とは

「桃の節句」であるひな祭りであっても、雛壇に飾るのは桜と橘です。これは京都御所の紫宸殿前に植えられている「左近の桜」「右近の橘」という木に由来しています。

※ 5 段目に設置

嫁入り道具とは

嫁入り道具とは、結婚するときに女性がその後の結婚生活に困らないように持っていく家財道具のことです。

種類は、「箆笥(たんす)」、「長持(ながもち)」、「挟箱(はさみばこ)」、「鏡台と針箱」「衣装袋」「茶道具」などが一列となり飾られることが多く、箆笥、長持、挟箱の三種一組で三つ揃いとも言われています。

※ 6 段目に設置



御所車と御駕籠とは

御所車(ごしょぐるま)は、昔の貴人が使用した乗り物で、牛がひくことから「牛車」とも呼ばれており、御駕籠(おかご)は昔の貴族の女性が使用した乗り物で、黒の漆塗りに美しい蒔絵を施しているものが多いです。

※7段目に設置

緋毛氈とは

緋毛氈(ひもうせん)は雛人形の下に敷かれている赤い布のことをいい、寺院や神社で絨毯代わりに敷かれる事があり、結婚式にも使用されているものです。

赤色には魔よけの効果があるとされていることから、赤色の緋毛氈はこどもが健康的に育つようにという願いが込められています。

貝桶と行器

嫁入り道具では「貝桶(かいおけ)」と「行器(ほかい)」が入っていることもあります。貝桶とは「貝合わせ ※後述」に使用する貝を入れるための道具であり、六角又は八角の容器で二個一組となります。

行器とは外出時に食べ物を持ち運ぶための道具であり、円筒形や四角形が多く外側へ反った脚が付いており、食べることに困らないようにという願いが込められています。

貝合わせとは

「貝合わせ」とは蛤貝の内側に絵や歌が描いてあり、同じ絵の貝を二つ合わせる遊戯のことを言います。蛤は対の貝以外とは決して合わないことから夫婦円満、仲の良さの象徴とされており、嫁入り道具の一つとなったと言われています。



紫宸殿とは

紫宸殿(ししんでん)とは内裏の正殿であり、各儀式や即位礼が行われます。天皇が普段居住される清涼殿に対し公的な行事に使用される場所が紫宸殿です。この紫宸殿を模した御殿の中におひな様を飾った「御殿飾り」が江戸時代後期頃から昭和40年ごろまで関西、中部地方を中心に飾られていました。



【人形の種類】

享保雛とは

江戸時代中期の享保年間(1716～1736年)頃に京都で生まれ、全国的に流行したひな人形の様式です。

裕福な町人を中心として人気を集め、能面のような面長で静かな顔立ちと豪華な衣装が特徴で、徐々に大型化されていきましたしかしながら幕府から贅沢禁止令が発令されたことにより大きさの制限(高さ八寸(約24cm)以下)が設けられました。

古今雛とは

江戸時代の後期に江戸で生まれたひな人形の様式です。

名前の由来は「古今和歌集」にちなみ、名付けられたと言われています。

瞳にガラス玉を使用した「玉眼(ぎょくがん)」のものが多く、生き生きとした表情が特徴であり、従来のひな人形より人間的な表情をしています。

男雛は堂々とした公家の正装姿をしており、女雛は公家装束を参考にしながら豪華さが加味され、女雛の天冠(宝冠)も華やかに工夫されています。

現在のひな人形の原形とも言われています。



稚児雛とは

公家の子どもの姿を模して作られた「稚児雛(ちごびな)」は通常の雛人形のように天皇皇后のような威厳ある姿ではなく、金色の烏帽子(えぼし)を被った男雛や前髪を左右に分けた少女のような髪型の女雛など、子供らしい愛らしさがあるのが特徴的です。

木目込みひな人形とは

木目込みひな人形は江戸時代中期に京都で生まれた技法による人形の様式です。胴体は桐の粉と糊を混ぜた桐塑(とうそ)が土台となり、胴体の原型に筋彫りをし、その溝に布の端を埋め込むようにして衣装を着せることで胴体と布が一体化し型崩れしにくく、また衣装を着ている一般的なひな人形と比べ、童顔で人形自体も小ぶりなものが多いことも特徴的です。

稚児雛



木目込みひな人形

